

のもの連続測定を行い、之等諸因子の治療による変動をも観察した。

41. 当教室最近10カ年間に於ける習慣性流早産患者の統計的観察

(名市大) 渡辺金三郎, 飯田茂樹, 大野義彦
蟹江悦基, 小寺 隆, 森川重正
森田 潤, 原田高和

習慣性流早産の原因は種々であり而もその因子のうちには未だ発生原因の不明のものさえある。従つてこれが系統的原因の検索と系統的治療指針の確立とは現下に於て最も望まれているところであり、吾々も数年前よりこれが研究を企図し既に其の原因の1つとして頸管無力擴大症とこれが頸管整形手術とその治療成績について報告して来たが、今回は習慣性流早産患者の実態を把握すべく最近10年間に於ける当教室外来患者を対象として本症患者の統計学的考察を試み興味ある知見を得たので報告する。

1) 最近10年間に於ける習慣性流早産患者の頻度は、外来患者総数 53785例に対し394例0.73%なるも、年度別には漸次増加の傾向が認められ最近3年間の頻度は約1.2%であった。

2) 該当患者の流早産回数は3回が最も多く、その頻度は該当患者数の66.8%をしめ次いで4回18.0%以下回数増加に伴い漸減傾向を認めた。

3) 該当患者に於ける原発及び続発の区別は流産例に於ては原発37.6%、続発27.4%、流早産合併例に於ては原発21.1%、続発 8.4%、早産例では原発 4.0%、続発 1.5%であった。

4) 該当患者の初診時年齢は原発性のもものでは26~30才の者が全体の25.6%で最も多く以下31~35才, 21~25才の順となっている。続発例では原発例よりも若干年代的に高令で31~35才の者が最も多く全体の11.2%、以下26~30才, 36~40才の順であった。

5) 該当患者の結婚年齢は原発並びに続発共20~24才を最多とし特別の関係を認めなかつた。

6) 該当患者に於ける原因疾患としては、性器炎症性疾患後、人工妊娠中絶後、並びに頸管及び陰部病変、及び子宮位置異常が最も多く全体の約30%を示した。原因不明例は約19%であり、性ホルモン異常は当然之に含まれるものであり、此等の検索が重要な一課題であることを知り得た。

7) 血液型の検索に於ては適合群不適合群ほぼ同率に存することを認めた。但し直ちにこれが原因をなしているとは断定し得た例は僅かに3例であった。

8) 子宮卵管造影法を施行した影像所見では主病変部位の子宮頸部に存する者は全体の54.0%でとくに内子宮口部擴大癭痕例が多く子宮体部病変を認める者は全体の25.5%で子宮体低緊張例が多く認められた。

42. 外妊の内膜所見, 特に腺の変化について

(都立大久保) 三宅秀郎, 丸山正義

当院の最近2年半の外妊96例中、原則とし手術前に掻爬した76例の内膜の所見(凝血、壊死等の標本不適6例あり)。

1. 間質の脱落膜化30例, (±) 3例, (一) 37例である。脱落膜細胞は退行変性を示すもの多く、又小原のいう血管反応は7例に見られた。

2. 内膜腺を假に次の如く分けた (a) Opitz の圖示した定型的妊娠腺, (b) a の変形で, Opitz も妊娠腺としている群, (c) 河合, 鈴木又は Arias-Stella の述べた特殊像の群, (d) 以上の a, b, c には該当しないが妊娠と関係ありと思われる腺変化を示す群, (e) その他。

(d) は、腺は円形乃至楕円形、腺上皮は扁平で低く、核は濃染し、原形質は円味を帯び、酸好性を示し、空泡が見られない。(a) とは乳嘴状なき点, (c) とは核の異型, 多形性のなき点で異なる。従来この群の記載が少いが後述の如く存在価値がある。

3. (a) 群2例, 2例共脱落膜化(D化)あり, (b) 群13例中D化を11例に認めた。中7例では他の場所に(d)像がある。(c) 群9例中D化あるもの3例, (d) 群31例中D化あるもの12例である。尚本群中には他の場所が分泌期又は増殖期像を示しても、一部にその特徴があれば入れてある。又往々にして本群像は崩壊し散在するから注意を要す。

4. フリードマン法を同時に施行した成績は、陰性5例, 陽性12例である。陰性5例は何れもD化はなく, a, c, d 像各1例あつた。陽性12例中D化3例(b像を伴う), D化はないがd像あるもの8例, 腺変化なきもの1例だつた。

5. 従つて従来D化の妊娠反應的価値よりも、腺変化(a)~(d)を加味して考えると、はるかに高率となる。自験例でもD化の率約40%が、80%にまで上昇することとなる。之は組織的に機能性出血等内膜変化を主とした検査時に、unsuspected case から捨上げするのに役立つ。

つから重要である。妊娠に関係した疾患と判明したら、此の補助診断法を併用して精査すればよい。

かくて昔 Opitz がD化よりも腺変化を重視し、其後 Sturgis, Arias-Stella, 本邦では河合、鈴木が賛していることは、内膜の妊娠性変化を知る上に重要と云わねばならぬ。

6. 又外妊手術後内膜搔爬を行うことが望ましい。先ず無害であり、早期止血の利がある外に、外妊を搔爬した時の肉眼的所見（更に組織像）を経験するに好都合で、特に修練時代に然りである。

7. 無出血又は急性重症例以外では、診査搔爬は肉眼的に内容を明視し得る点と、組織的には内膜所見が Hormonspiegel を示す点から、他法と併用する価値がある。即ち腺変化を主とすれば妊娠反応の価値が高く、臨床経過と対比すると之のみでも外妊を疑えることがある（フリードマン法の如く）。

43. 海狸の実験的結核症における妊娠、分娩、産褥及び仔の発育に関する研究（特に性周期を中心として）

（国立久里濱） 今井宣男

研究目的

1) 結核罹患動物（海狸）及び抗結核化学療法実施後の結核罹患動物の妊娠、分娩、産褥及び性周期に関する研究。

2) 結核罹患動物及び抗結核化学療法実施後の結核罹患動物より出生せる仔獣の発育、性周期、妊娠、分娩、産褥についての研究。

研究方法

1) 化学療法はストマイ、パス、ヒドラジットの3者併用（毎日法）を3カ月間連続。

2) 結核菌（H₃₇RV）接種部位 皮下（I群よりIV群まで）腹腔内（V群）

3) 被検動物群を化学療法実施群（A）と非実施結核罹患群（B）及び健康群（対照）に大別しA、B兩群を更に交尾時期により夫々I群よりV群に細別した。

AI 群：菌接種は3週間目より化学療法を行い終了直後交尾させた群。

BI 群：AI 群と同時期に交尾させた結核群。

AII 群：菌接種後1カ月目より化学療法を行い終了直後交尾させた群。

BII 群：AII 群と同期日に交尾させた群。

（以下 BIII 群, BIV 群, BV 群についても同様）

AIII 群：菌接種後2カ月目より化学療法を行い終了直後交尾させた群。

AIV 群：菌接種後3カ月目より化学療法を行い終了直後交尾させた群。

AV 群：腹腔内菌接種後2カ月目に化学療法3カ月を行い終了直後交尾させた群。

研究成績

1) B群ではBI, BII 群まで生存仔を得たが BIII, BIV, BV 群では1例も生存仔を得られず、非妊か流産であった。

2) A群でも化学療法の開始が遅れる程流産が多くなり、また妊娠持続期間も漸次延長し、出生せる仔獣の体重も漸次減少する傾向が見られた。

3) 妊娠成立迄の性周期の比較では、B群はA群に比して明らかに不規則となり、妊娠成立（又は交尾の時期）が遅れる程発情期の発現頻度が減少する。

4) 出生仔獣の数 化学療法実施の遅れるに従い親1匹あたりの平均出産仔数も減少する傾向にあつた。

5) 産褥期の体重の推移及び性周期については、AI 群より AV 群の間に著明な差は認められなかつた。

6) 仔獣の発育状態 体重の増加率では殆んど有意の差はないが、性周期の発現の遅速では化学療法実施の遅い程性周期の発現が遅れる傾向にあつた。

7) 仔獣の妊娠期間の比較では殆んど全群に著明の差は認められなかつた。

7) 第3代の仔獣の発育状態、性周期の発現については第2代と比較して著変なく、結核症の影響は特に認められなかつた。

9) 性周期の検索により所謂静止期にも交尾すること、発情前期の直前に粘液が多量増えること、出生直後より性成熟期まで多少とも変化のあることなどが分つた。

44. わが産院に於ける予定日超過の統計的観察（横濱市立産院）

竹下俊雄、市川孝男、中山方郎

我々は、昭和27年9月より昭和33年12月まで当産院で分娩し、最終月経が明かでも月経周期が27~33日の比較的整順なものを選び、妊娠第34週以降に分娩した5405例について分娩予定日を2週間以上超過した所謂遷延妊娠例の頻度、年齢、経産回数、胎児及び附屬物に関する統計的観察を行い、次の成績を得た。

1) 在胎日数の分布をみると、妊娠第40週（初産並びに経産共）が最も多く、これを頂点としてその前後に正